



同性婚・LGBTQ 選択的夫婦別姓について

国政であらためて性的少数者の人権や選択的夫婦別姓についての法整備が話題になっています。この度は、政府高官による同性パートナーへの差別発言がきっかけです。本人としては内緒話だったようですが、度を越しているとの判断で報道され、激しい批判を浴びました。マスコミの「約束破り」との声もありますが、これが部落差別や人種差別だったら看過できる記者はいないでしょう。



【変えたくないの何か？】

同性婚、性自認、夫婦別姓は、それぞれ別の問題だと思えますが、政府としては「家族観が変わる・社会が変わる」という一点に集約して同列に扱っているように見えます。一連の案件で「家族観が変わる・社会が変わる」から認めがたい、という政府の見解が過去からよく出されます。しかし、これは国政選挙が近づくとよく見かけた「美しい国を取り戻す」「改革」等の耳あたりの良いスローガンと同じです。過去や現在の、どの時点の家族・国・社会がどのような姿であり、それがどう変わる・どう変えたい・どこへ回帰したい、という説明がなければ、材料がなく検討すらできません。戦争で財を成した人は戦時中が良かったかと思っているかもしれませぬし、戦争で傷ついた人は、少なくとも戦争のない今のほうがマシと思っただけでしょう。家長制的な家族観に苦しんだ女性は、家族観の変化を望んでいるでしょう。同性婚については特に、認められて世の中が大きく変わるように考えにくいです。仲良しの家庭

があれば、パートナー間の喧嘩もあり、離婚もあるでしょう。異性間の夫婦と同じに考えればよいのではと思います。

また、結婚前に仕事などで活躍された女性が結婚後も旧姓を名乗られるケースが現職国会議員をはじめたくさんあります。そう考えれば、選択的夫婦別姓はすでに既成事実化していると思われ、政府の掲げる女性活躍推進の大きなポイントです。

昨今の状況下で家族観を変えたくない、と言われると、話題のカルト団体の教祖が決めた、見知らぬ相手と結婚して教義に沿った理想の家族を作りなさい、という話と親和性を感じます。

【人は世につれ 世はひとつにつれ】

これは、「歌は世につれ 世は歌につれ」のもじったものですが、私の知っている範囲でも随分と世の中は変わってきています。人思いや経験が社会を変え、また社会の空気が人を変えていきます。数年前、人権小地域懇談会でLGBTQ（性的少数者）の方々の人

権をテーマに町内のたくさんの方の声を聴きました。テーマに決めた私が予想したよりも遥かにみなさんの認識は進んでいて、そうした方々を否定するような意見は全くと言っていいほど出されませんでした。

一部の有力者がロマンティックな世界観、幻想に固執している間に大衆社会はずっと先を走っているのかもしれない。

3月の人権・行政相談所

【お知らせ】

■日時 3月10日（金）

・人権相談 午前9時～正午
・行政相談 午後1時～4時
■会場 子育て支援センター

人権や行政の仕事に関する相談を人権擁護委員、行政相談委員がお受けします。予約は不要です。お気軽にお越しください。

